

小児尿路感染症の研究

千葉大学医学部泌尿器科学教室 片 山 喬
 千大泌尿 安 田 耕 作
 岩 間 汪 美
 千大中検 小 林 章 男
 千大小児 新 美 仁 男

I. 女子小, 中学生における無症候性細菌尿

千葉県夷隅郡および勝浦市の女子中学生を対象に4年間にわたり行われた無症候性細菌尿調査の結果を紹介した。検出率は0.15~0.19%で, 小学生で高率(0.15~0.25%)に検出された。有意義な細菌尿を有した30名中6名は治療を行ったにも拘らず1.5年ないし観察全期間にわたり細菌尿が検出された。その70%に尿路X線造影で異常が認められ, 発熱, 失禁などの訴えがあった。他の8名は6カ月~1年間にわたり細菌尿が検出され, 50%に尿路造影で異常が認められたが, 訴えをもったものは少なかった。分離菌は1名の他はすべて大腸菌であり, 半数のものは膿尿を有したが蛋白尿は全例で陰性であった。

小林章男ほか: 日医新報 No. 2787, 19, 1977.

II. 千葉市学童における無症候性細菌尿

千葉市全学童を対象として第1次, 第2次検査はウロトレース法, 第3次検査は定量培養, 菌の同定により細菌尿の検査を行い, 77,950名中女子63名(0.16%), 男子5名(0.013%)に有意義な細菌尿を認めた結果を紹介した。この68名のうちさらに連続して細菌尿を認めた6例に対し, IVP, 膀胱鏡, voiding UCGなどの泌尿器科的検査を行ったところ, うち1例に明らかなVURを, 他の1例に膀胱の変形などの所見を見出した。

表 1

	外 来 患者数	小 児 患 者			小児尿路感染症患者		
		男	女	計	男	女	計
昭50	3,383	334	123	457	38	24	62
52	2,555	327	138	465	20	37	57
52	2,378	264	72	336	26	27	53
計	8,316	925	333	1,258	84	88	172

III. 千葉大泌尿器科外来における小児尿路感染症について

千葉大泌尿器科外来における昭和50~52年の3年間における小児尿路感染症は表1に示す如く172例であった。

これを年齢別にその分布をみてみると男女とも5~6才と13~14才の両者にピークが認められた。来院時主訴では排尿痛が最も多く, ついで頻尿, 血尿, 発熱, 夜尿の順であり, 診断名としては膀胱炎が最も多く, ついで腎盂腎炎, 包皮炎, 陰外陰炎, 尿路結石, 神経因性膀胱の順になっていた。又, 検出された細菌の種類では大腸菌30例, 腸炎桿菌5例, Klebsiella 4例, 連鎖状球菌3例, 変形菌2例, Candida 1例であった。また尿蛋白は(-)~(±)のもの109例, (+)~(卍)のもの38例という結果であった。

小児尿路感染症の臨床的研究

神戸大学小児科 松 尾 保 平 海 光 夫
 池 内 春 樹 上 原 慎一郎

I. はじめに

小児尿路感染症は上気道感染症に次いで小児の発熱の

原因疾患であり, 多彩な臨床症状を呈する。一方, 近年学校検尿の普及により不顕性または無症候性の細菌尿患児が発見されるようになり, このような児が将来腎実質

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

. 女子小, 中学生における無症候性細菌尿

千葉県夷隅郡および勝浦市の女子中学生を対象に4年間にわたり行われた無症候性細菌尿調査の結果を紹介した。検出率は0.15~0.19%で,小学生で高率(0.15~0.25%)に検出された。有意義な細菌尿を有した30名中6名は治療を行ったにも拘らず1.5年ないし観察全期間にわたり細菌尿が検出された。その70%に尿路X線造影で異常が認められ,発熱,失禁などの訴えがあった。他の8名は6カ月~1年間にわたり細菌尿が検出され,50%に尿路造影で異常が認められたが,訴えをもったものは少なかった。分離菌は1名の他はすべて大腸菌であり,半数のものは膿尿を有したが蛋白尿は全例で陰性であった。

小林章男ほか:日医新報 No.2787,19,1977.